

正保城絵図による城下町の道路延長に関する考察 - 畿内とその周辺地域を対象として -

新潟工科大学工学部 油浅耕三

1. 緒言

正保城絵図は、いうまでもなく、徳川家光による幕命として各大名が調製し、1枚を幕府へ提出した¹⁾。

提出された正保城絵図(以下、本論文では「城絵図」と省略する)は、およそ150~160枚程度と考えられている²⁾。このうち、現在、63枚が旧江戸城内の紅葉山文庫より伝えられ、国の重要文化財に指定されている。この「城絵図」は、城下町の部分も描かれており、63枚以外に、紅葉山文庫より流出したもののや³⁾、藩の控や写し絵図と考えられるものなどを含めると75枚前後が今日伝えられている。

「城絵図」はまた、30項目からなる幕府の絵図の調製条項⁴⁾に沿っているため、全体として、統一した表現内容に仕立てられているという特色を持っている。同時に、城の絵図としても町を描いた絵図としても、各藩において、最古の絵図といえるものである。

この徳川家光の時代は、全国の城と町の建設工事が、ほぼ完成の時期にあたる。「城絵図」は、このように、日本の城と城下町の状況を同時代で比較考察できる唯一ともいえる史料としての意味をもつといえる。

著者は、「城絵図」により、城下町の道路について、道路幅⁵⁾と道路の交差形態や交差点密度⁶⁾について考察した。ここでは「城絵図」により、道路延長⁷⁾を取り上げ考察しようとするものである。

2. 考察対象地域

管見するところ、従来、城下町の道路長さに対する考察はみられない状況にあるといえる。道路延長の計量値は、城下町の規模と相関する関係にあると判断されるが、同時に、個々の城下町における街区の規模や形の違いを大まかにみる上で1つの指標とも考えることができる。

地域性を考える場合、例えば、東日本と西日本とか、街道別などでの違いをみる側面と共に、地域の境界部分での共通性という側面でもみることも重要なことと考えられる。

かかる観点より、ここでは畿内とその周辺地域を取り上げる。畿内には、江戸時代初頭の正保年間(1644頃)当時、幕府の二条城や大阪城の他に、藩としての城は、淀・大和郡山・高取・岸和田・高槻・尼崎が存在しており、「城絵図」は、6枚が存在したと考えられる。

幕府へ提出された「城絵図」には、その後、絵図を折りたたんだ外題の部分に、畿内より街道ごとに朱の番号が書き込まれたが⁸⁾、伊勢国の桑名が「7」番であることから、畿内の「城絵図」6枚は、この点でも推察できる。

現状では、畿内で管見される「城絵図」は、大和郡山・岸和田・高取の3枚が知られる。この畿内と畿内に連続する国々の内、「城絵図」が伝えられ、かつ城下町の面積を計量できる大和郡山・岸和田・松坂・桑名・膳所・亀岡・篠山・福知山・明石・新宮の10城下町を取り上げることとした。

3. 道路延長の考察区域

「城絵図」の道路幅表現では、2m以内の場合は、場所により省略されたともみられる点が指摘できる⁹⁾ものの、全体としては、個々の城下町における他の絵図に比して、丁寧な道路表現であるといえる¹⁰⁾。

同時に、「城絵図」は、道路幅の中心部分に朱色の線が引かれている。この朱線は、大和郡山、岸和田のように、城の本丸の出入り口まで表現しているものが多いものの、松坂や新宮のように二丸の出入り口までのものや、大垣・白河など三丸の出入り口までのものなど、「城絵図」の表現様態はまちまちといえる。

本考察では、城(内郭部分)と城下町との境界は、三丸以内の各曲輪が連なる堀・土居・石垣・道路などで仕切られる部分¹¹⁾、城下町と城下町外の境界部分は、堀・川・土居・池・道路などで仕切られる部分で、それぞれ内と外を等分する形で区切る¹²⁾こととし、道路長の計量区域は、内郭の侍屋敷の部分までとした。

4. 道路長の計量方法（図1 - 3 参照）

「城絵図」を $S = 1 : 25000$ の地形図上に復元投影した復元図の道路長を計量する（前述した「3. 道路延長の考察区域」内）。道路長は、道路の中心線にそって計量した。なお、道路長の計量は、四捨五入により、1.0mmまでを計量することとした。



図1 和州郡山城絵図（国立公文書館蔵）

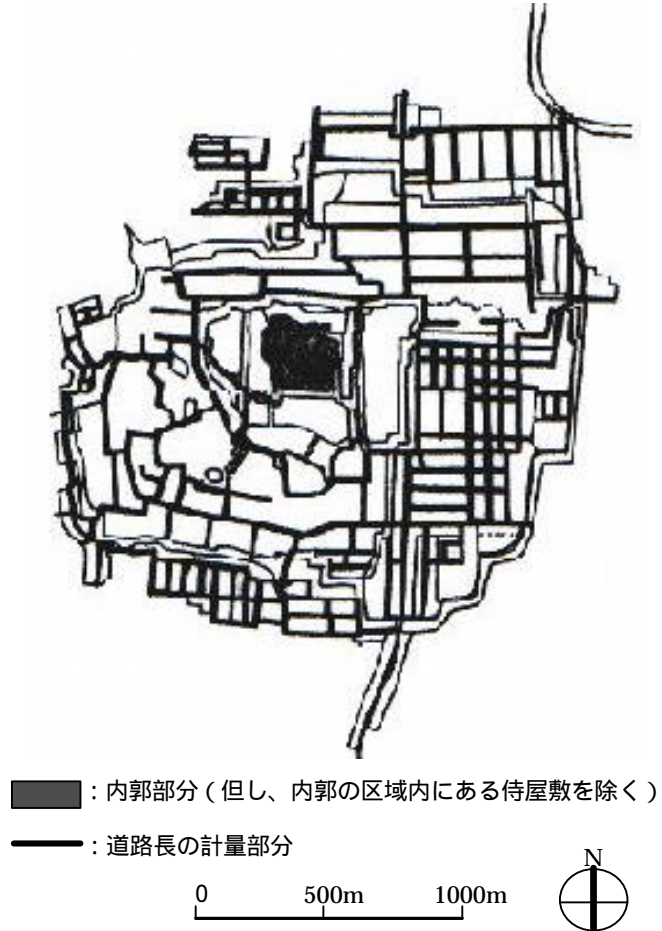


図2 大和郡山城下町・復元図（図1による）

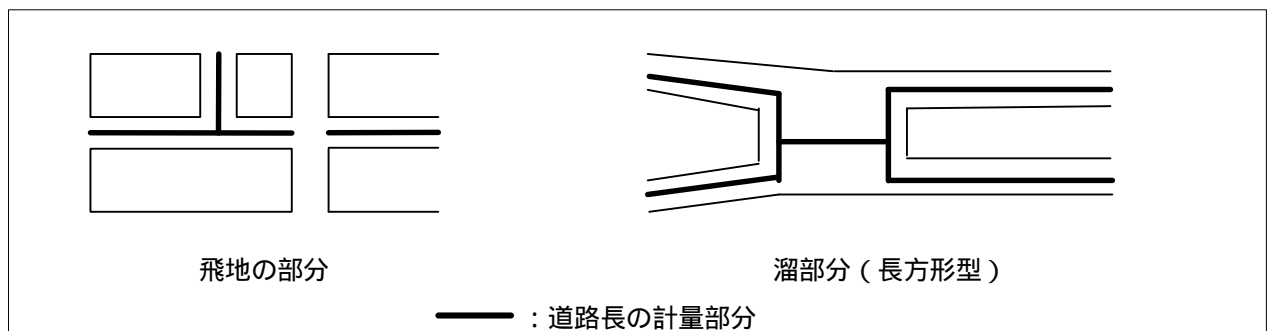


図3 道路長の計量に関する図（飛地・溜部分）

5. 道路延長と城下町の面積規模

道路長の計量値を整理したのが「表1」である。これらの計量値を藩の石高や城下町の面積規模との関係で数値に注目してみると、考察対象地域でのこととして、桑名と篠山では、桑名が篠山より街区の規模が小さく形がより複雑であると考えられる。また、「表1」の $S1$ に対する道路の交差形態量（ RC ）⁶⁾の割合（ $RC/S1$ ）では、桑名（ 328.5 ）が篠山（ 153.6 ）より高く、複雑な道路形状と判断できる。

畿内においては、岸和田（ $RC/S1 : 278.9$ ）の方が、大和郡山（ $RC/S1 : 207.8$ ）より街区は、規模が小さく複雑な形で、道路形状も複雑という見方ができる。

表1 城下町の道路延長・（畿内とその周辺地域）

S：城下町面積（ km^2 ）。 S 1：Sより内郭部分の面積（但し、内郭の区域内にある侍屋敷を除く部分の面積）と空地部分の面積（城下町の区域内にある田・河原・川・池・沼の部分の面積）を除く城下町面積。 RL：道路延長。 丸数字：各項目別の数値の順位。						
城下町名	石高（万石）	城下町面積（ km^2 ）		道路延長（ km ）と城下町面積（ km^2 ）		
		S	S 1	RL	RL / S 1	平均値
大和郡山（大和国）	12.0	2.06	1.92	31.25	16.12	16.21
岸和田（和泉国）	5.3	1.13	1.09	19.08	17.51	
松坂（伊勢国）	紀州徳川氏 持城	1.06	0.94	13.58	14.45	
桑名（伊勢国）	11.0	1.33	1.23	24.88	20.23	
膳所（近江国）	7.0	0.76	0.73	10.80	14.80	
亀岡（丹波国）	3.8	0.85	0.80	11.55	14.44	
篠山（丹波国）	5.0	1.25	1.10	15.78	14.35	
福知山（丹波国）	4.5	0.84	0.75	11.60	15.47	
明石（播磨国）	7.0	1.73	1.46	22.70	15.55	
新宮（紀伊国）	3.5	0.75	0.53	10.15	19.15	

表2 城下町の道路延長・（城下町の面積規模別）上段：規模大。下段：規模小。

城下町名	石高（万石）	城下町面積（ km^2 ）		道路延長（ km ）と 城下町面積（ km^2 ）	
		S	S 1	RL	RL / S 1
仙台(陸奥国)	62.5	11.22	10.25	103.18	10.07
山形(出羽国)	15.0	5.93	5.59	54.13	9.68
水戸(常陸国)	28.0	5.31	4.09	45.95	11.24
丸岡(越前国)	4.0	0.61	0.50	7.73	15.46
大洲(伊予国)	6.0	0.57	0.48	8.70	18.13
日出(豊後国)	2.5	0.34	0.32	5.05	15.78

同時に、膳所（ $RL/S1:224.7$ ）は、藩の石高との関係と併せてみると、街区は比較的規模が大きく、さほど複雑な形をとらないものの、道路形状は複雑と考えられる。また、松坂（ $RL/S1:138.3$ ）の街区は、比較的大きな規模で複雑さをもち、道路は単純な形状とみられる。新宮（ $RL/S1:267.9$ ）の街区は、規模が小さく複雑さをもち、道路は、複雑な形状が多いと判断することができる。

「表1」の計量値をより広い範囲でみるために、城下町の面積規模¹²⁾の大小の各3城下町を取り上げ、

道路延長の計量値をみたのが、「表2」である。「表2」により城下町の面積規模の大きい町は、「RL / S 1」値が低い点があがえるが、大和郡山・明石・篠山をみると同様な側面としてみることもできる。

また、畿内と周辺地域の城下町での「RL / S 1」の差は、5.88であるのに対し、「表2」での6城下町での「RL / S 1」の差は、8.45となる。藩の石高の違いでみると、仙台(62.5万石)と日出(2.5万石)での「RL / S 1」の差は、5.71で、「表1」での大和郡山(12万石)と新宮(3.5万石)での差は、3.03となる。数値の差でみると、畿内とその周辺地域という狭い範囲では、類似した傾向の城下町が存在しているようにみることができる。

6. 結 言

いうまでもなく、藩の石高により城下町の人口は違いをもち、結果として、城下町の面積規模も関連する形をとると判断できる。しかしながら、各藩に伝わる侍の屋敷規定によると、同じ禄高であっても藩により与えられる屋敷規模は違いをもっている。また、城下町を計画した地形の状況や築城者とか年代の違いなどといった諸々の状況が組み合わさって城下町の街区や道路が存在し今日に伝えられている。

畿内とその周辺地域の城下町について道路延長を考察したが、地域の境界と接続する部分を含めた範囲の全体をより広い視点で見ると、道路延長の計量値において、共通した性格をもつ城下町が多いと判断したい。

同時に、道路延長の計量値は、藩の石高とか城下町の面積規模や道路の交差形態とその総量と併せみることにより、城下町のもつ性格の一端を個々の城下町について説明できると考えられる。

[補 注]

- 1)『古より公儀江被上候御城絵図御国絵図改申品々之帳』(金沢市立玉川図書館蔵)
- 2)矢守一彦(1986):『名城絵図集成・東日本之巻』、小学館、P. 4。
- 3)油浅耕三(1986):「流出した旧紅葉山文庫蔵会津・仙台・高田の正保城絵図についての一考察」(『日本建築学会計画系論文報告集・第377号』)、PP. 119 - 128。
- 4)『忠宗君記録引証記』(国立公文書館蔵)他で伝えられているが、国絵図と共に30項目からなる絵図の書込み内容に関する調製条項があり、城絵図のみの条項としては、9項目がみられる。
- 5)油浅耕三(1985):「正保城絵図による城下町の集住地域における道路幅の特質」(『都市計画・136号』)、PP. 81 - 87。
- 6)油浅耕三(1991):「正保城絵図による城下町の道路の交差形態と交差点密度に関する考察」(『都市計画・167号』)、PP. 89 - 99。
- 7)道路延長については、今日の現状では、総延長・実延長・舗装延長などいろいろの見方でのデータが計量され、取り扱われている。ここでの「道路延長」とは、「城絵図」に描かれている道路表現の内、城下町の集住地域(城の内郭部分については侍屋敷の部分までを含める)における道路長さの総計をいい、「集住道路延長」とでも称すべき範囲内。
- 8)油浅耕三(2000):「正保城絵図の朱番号についての考察」(『新潟工科大学紀要・第5巻』)、PP. 25 - 30。
- 9)油浅耕三(1984):「正保城絵図の表現内容に関する一考察」(『名古屋工業大学学報・第35巻』)、P. 234。あくまで、「城絵図」以降の絵図での指摘のため、確かなこととは言い切れない。
- 10)油浅耕三(1976):「越後国高田城絵図について」(『日本建築学会大会学術講演梗概集』)PP. 1711 - 1712。ほか。
- 11)油浅耕三(1988):「正保城絵図による城の内郭面積の規模に関する考察」(『名古屋工業大学学報・第35巻』)、PP. 253 - 259。
- 12)油浅耕三(1985):「正保城絵図による城下町の面積規模に関する考察」(『都市計画・別冊20号』)、PP. 7 - 12。